

すぐそこの未来

● きものの未来を明るく

きものを着る人の多くが漠然と知りながら、積極的に話そうとしないのがインクジェットプリンターでつくられたデジタル捺染ちまぞのきものではないだろうか。インクジェットできもの染めができると初めて聞いたのは、もうかれこれ十年近く前。知りあいの京都の悉皆屋しつぱいやさんが、「これからは京友禅といってもインクジェットの時代になるんやろか。何でもできるといえばできるんやけど」と、今ひとつ納得しないという表情で話してくれたことがある。聞きながら私は家庭用のプリンターを思い浮かべて半信半疑のような、手仕事の伝統工芸とインクジェットの簡便なイメージとのギャップに戸惑いを感じていた。

以来、何かの折にデジタルプリントのきものと思うものを

見かけることがあるのだが、はっきり突きとめるわけではなく、ほかの染めとどこが違うのか、おおっぴらには聞きにくく、ついそのままになっていた。

新しい技術にはきつとこれからの可能性もひらけているはずである。それらについてきちんと知識を持った上で判断するならば、着るも着ないも個人の自由だが、知識をとまわずに感覚だけでもを言うのは偏見でしかない。是非にと希望して、インクジェットプリンターでつくるデジタルきもの見学へと向かった。

取材をお願いしたのは、株式会社デジナの居内久勝いうちくさとしさん。社名はわかりやすいのが一番と、デジタル捺染からデジナと名づけ、二〇一二年五月に創業した。ネットショップ「居内商店 ゴフクヤサン・ドットコム」ではデジタル捺染のきものを販売している。事務所は大阪の船場ふねばにあるが、インクジ

あおきなお
一九六三年、東京都生まれ。学習院大学大学院修了後、翻訳や通訳をしながらドイツに滞在。帰国後、『ハリネズミの道』でエッセイストとしてデビュー。著書に『幸田家のきもの』ほか。曾祖父・幸田露伴、祖母・幸田文母・青木玉と続く幸田家四代の文筆家。



新潟県十日町市のデジナ新潟工場で見学する筆者。デジタルの特性を生かし、型を使わずに、一枚からプリントが可能。



91頁でプリントした猫柄の留袖。



同じ猫柄を帯にしたもの。

エットの染めは新潟県十日町市の魚沼整染株式会社で行っていると伺い、そちらでお目にかかることになった。

十日町市といえば日本で一番長い信濃川が流れる米どころというイメージだが、冬は積雪が二、三メートルにもなる日本有数の豪雪地帯である。農閑期となる冬が長く、雪に囲まれて湿度が高いことから、昔から麻や絹織りものが盛んにつくられてきた。

一帯は十日町でも染色業に携わる企業が集まり、染色団地と呼ばれている。外からでは中の様子は窺えないが、お隣りは鯉のぼりを専門に染めている工場なのだそうだ。

魚沼整染さんが主に行っているのは、絹や化繊などを染めたあとの蒸し、水洗い、仕上げ加工であるという。依頼を受

けて扱う布は和洋問わず、小幅も広幅も、素材もまちまち。

染料を定着させる蒸しの工程ひとつとっても、絹ものの手捺染の場合、蒸し時間が一時間以上かかるのに対し、染料が異なるデジタルプリントの蒸し時間は半分程度ですむ。その代わりというわけではあるまいが、布に染みこんだインクの量が手捺染に比べて少ないため、蒸している間も枠に張った布を絶えず動かしつつづけていないと染めムラが出てしまうと。蒸し機への布の出し入れには熱い蒸気がもうもうと立ちのぼる。

洗い場には、蒸しを終えたあとの防染糊や余分な染料を落とす洗浄機が置かれ、色あざやかな友禅の絹地が全自動で送られてゆく。手のこんだものになると、一度糊を落としたあ

とに新たに糊伏せと染めがくり返されるのだそうだ。

傍らでは、この地方の伝統的な織りもののひとつ、本塩沢ほんしおざわを湯もみして独特のシボをつける作業が行われていた。「全体に均一にきれいなシボをつけるのは大変な重労働なんですよ」と、魚沼整染の涌井安次郎わくいさんが説明してくださるのだが、その声はあたりに響く水音と機械音でかき消されがちだ。つづけて仕上げ加工をしているところへ伺うと、水洗いのすんだ布の幅を整え、蒸気をあててシワをのばす作業が行われていた。テンター、カレンダー、蒸絨機じょうじゅうきといった耳慣れない機械の名前は、ただ書き記しただけでは意味をなさないかもしれないが、およそのことを理解したつもりになっているきものについて、まだまだ知らないことがたくさんあることをこれらの機械名が教えてくれている。

夏の暑い盛りには熱や蒸気を扱う工場内は五十度にもなり、冬の水仕事はさぞかし身体にこたえる冷たさだろう。自分が身につけているきものがどのようにしてつくられているか、改めて思いをめぐらせる工場見学だった。

● これまでと異なる何か

さて、インクジェットを使ってデジタルプリントをしている別棟へと伺うと、それまでとは打って変わって工場というより大きめの事務所といった感がある。五、六台のインクジェットプリンターが稼働しており、パソコンの画面を見ながら操作している人がいる。布は工場内であらかじめ素材に応

じて全体に糊づけされており、発色をよくし、染料のにじみ防止のためには必要な手順と伺った。

インクジェットプリンターは一見したところ家庭用のものとさほど違いはなく、ただ広幅の布がプリントできるだけの大きさがある。プリントしたての色は、幾分はつきりしないようにも感じられるが、染料は蒸したのちに発色するようになっていたので、最終的な色とは異なるとのこと。

プリントヘッドが右へ、左へ往復し、見ている間に次々に模様を描き出される。このとき見せて頂いたのは、シルバーグレーの地に白黒ハチワレの猫柄のきもの。絵羽仕立てだが、訪問着というより街着、楽しいおしゃれ着である。広幅の布にきものの展開図がプリントされ、切り取って縫えばできあがる。

デジタル捺染については工場見学にご一緒くださった居内さんからお話を伺った。

「紳士物のスーツに比べたら、きものは直線に縫えばいいだけですから、一枚三時間。それは無理でも、一日でできなければおかしいと思うんです。今はまだ海外へ縫製に出しています。これからはすべて国内でつくる術を考えておかないと、もう何もかも中国へ持って行って大量につくるという時代ではなくなります。国内で一日一枚つくれる人が百人いれば、その人たちをネットでつないで、当座はまかなえるでしょう。近い将来、専門学校にデジタルきもの学科をつくって、デジタルきものに適した染め方、つくり方を教えること



インクジェットプリンターで染め上がった生地を蒸して色を定着させる。蒸気の上がる作業場はスチームサウナさながら。

も考えています」

居内さんのお話は熱くつづく。ハチワレの猫のきものは私たちが伺った日もネットを通じて何件か注文が入っており、値段は若い人が手にとりやすいように、ちよつと高めのワンピースという価格設定。絹地とポリエステル素材のセオ^アでは、セオ^αの方が好まれるのだそうだ。「絹至上主義ではなくなっているんです」と居内さん。色や風あいなど、実物を確かめることなくネットで注文して、返品もないという。

これまでのきものの概念とは異なる何かが目の前で動き出している感がある。話を一度もとにもどして、居内さんがデジタルきものとかかわるようになったいきさつから伺うことにした。

● 「後ろ向きではない」 デジタル

居内さんのお宅はご両親の代から大阪市船場で呉服店を営んでいらつしやる。ご自身は一時期、別の仕事をしていらつしやつた時期もあつて、ご両親に「せめて土日だけでも手伝つて」と言われ、インターネットでのきもの販売を始めたことがきっかけとなつた。二〇〇〇年ころ、ネット販売できものを扱う店はまだ数少なく、お客さんの要望に耳を傾けると、冬でも着られる木綿のきものをほしがつていた。

船場という場所柄、近くに生地メーカーがたくさんあつた。生地を仕入れて木綿のきものをつくつたが、売れ行きがよかつたのは最初の四年で、同じような店が増えるとたちま

ち安売り競争に巻きこまれた。ほかでも買える生地を使っている限り価格競争を抜け出すことはできない。こうしてインクジェットプリンターを使ったオリジナルのきものづくりを思い立ち、看板用の大型プリンターに繊維用のインクで試行錯誤を始めた。

四年ほどかけてプリンターの改良を重ね、そのまま大阪でデジタルきもの製作を本格化させたが、染料の蒸し時間や糊の調節など、一貫したもののづくりをしようと魚沼整染さんの工場内にプリンターを移設。それを幾に魚沼整染の浦井さんほか数名で株式会社デジナを興した。

二〇一〇年前後はきもの業界全体にとってもインクジェットプリンターの導入が大きく進んだ時期に重なっており、デジタル捺染のレベルがあがった今は、一見したところ職人さんの手仕事と見分けがつかないところまで技術が進んでいるという。

「実際、振り袖の七、八割がインクジェットでつくられるようになってきているのに、そのことを隠して京友禅のシールを貼ったりしているんです。けれど、職人さんの手仕事の模倣をしてコピー機みたいな使い方をしている限り、インクジェットは職人さんの手仕事には負けます。例えば、インクジェッ



上／蒸した後水洗いを経て、糊を落として色を留める。
下／水洗いした反物を約50度の熱風で乾燥させる部屋。

トでは金彩の色は完全には表現できませんし、金の質感は同じにはなりません。ですが、インクジェットにはインクジェットに得意な分野があるんです。デジタルでつくることは、僕は決して後ろ向きなことではないと思っています」

そして教えて頂いたインクジェットの長所は、何よりもまず色彩の豊かさと製版がいらぬ点である。

従来のオートスクリーン捺染と比較すると、オートスクリーン捺染では並べた版の下を布が動いてプリントされるしくみのため、使う色数に応じて版をつくる必要がある。版を増やすほど版代がかさみ、無制限に長いラインを組むこともできず、二十色が限度なのだそう。初期投資がかかっているので、大量生産が前提となる。

それに比べてインクジェットはカラーチャートから選びさえすれば、十六万色が自在に表現可能となる。どんな微妙な色調のグラデーションも、写真をそのままプリントすることも、身体全体をおおうような大きな柄も難なく染めることができる。

製版しなくてすむことで初期コストが抑えられ、通常二カ月かかっていた納期を二週間に縮めることができる。一枚からでもプリントできるので、お客の好みに応じて柄を色違いにしたり、地色を無地から縞に、あるいは水玉といった個別対応もお手のものだ。

「世の中、いろんな分野で八・二の法則と言われますけれど、ネット販売にもあてはまります。どんなに売れそうなものに



干した反物を巻くための「テンター」という機械。

絞りこんでも、十通りの内、売れるのはふたつで、残りの八つは売れない。逆にこんな売れへんやんと思うものが、意外に人気が出たりします。昔ならコマーシャル打って、流行をつくり出していましたけど、特にこの十年、個人の好みが多様化してオリジナルを求めています。デジタルきものならこちらは在庫を抱える心配なしに、日々新しい提案をお客さんに見てもらえることができる。そしてネットショップを訪れる八割のお客さんには楽しんでもらったらいい。それができるのがデジタルきもの、多品種少量生産に向いているんです」

それでも、従来の価値観できものになじんできた着巧者が、

今すぐデジタルきものに飛びつくことはないのかもしれない。洋服が日常になった今の世で、私はきものが着られることはひとつの福だと思っているが、一生を通して質のよさと自分の好みだけを基準にきもの選びができるとしたら、かなり恵まれた立場なのではないだろうか。デジタルきもので若い人を中心に気楽なおしゃれ着としての需要が新たに掘り起こされれば、職人さんの手仕事と競合することはないだろうと思う。

その一方で知っておくべきことは、エルメスのような海外のラグジュアリーブランドでもインクジェットプリンターが導入されており、海外ではインクジェットにコピー機の機能は求めておらず、安価とかレプリカのイメージはついていないという点だ。ほかの染色方法では表現できないことを実現する手段として積極的に取り入れられているという。

きもの話をしていれば、当然のように伝統ということば

が使われる。大切にしなければ失われやすく、ひとたび失われてからの復活は容易ではない。けれど、どんな伝統も、それがある時点での最先端の技術革新や偶然の発見からうまれたことを忘れてはいけないのではないだろうか。日本でインクジェットプリンターについてしまったいわれのない後ろめたさが早く消えて、その長所を明示したきものができればと思う。

● 次なる着手を

ご両親の代から呉服店をつづけていらっしゃる居内さんにお話を伺っていると、小売店の立場から見たまきもの現状がここ半世紀の過去にさかのぼって浮き彫りになる。

きもの業界は、現在、八十歳から上のボリュームゾーンの人たちとともに進化し、ピークを迎えて衰退してきているのだという。いわばこの「最後のきもの世代」の人たちが四十

告 広

代のころ、普段着としてウールのきものがはやり、この世代の子どもたちの入学、卒業式にあわせて、色無地に黒羽織というような、新しいきもののブームが売り手主導でつくられていった。さらに歳を重ねて生活にゆとりができるようになると訪問着や留袖が売れ、きもの業界は「最後のきもの世代」の推移とともに成長しつづけてきた。

ところが、この世代が七十歳になったあたりからきもの売上が急激に落ちた。一定の年齢層に特化して商売をし、あとにつづくきもの着手を育ててこなかったのだから無理からぬなりゆきだろう。「この間、業界は売り方のノウハウばかりを磨いていました。なぜ値段が高くなるのか、言いわけ的な値打ちづけに終始して、実際に着る人のことを考えてこなかったんです」と居内さんは手厳しい。

今、居内さんのネットショップで積極的に意見を発するのは、最後のきもの世代の子どもたちにあたる、現在四十代の人たちが主流なのだそうだ。この人たちの子ども時代の記憶には、日常をきもので過ごしていたお祖母さんや、晴れの日にもきものをよそおった母親の姿が残っている。その上で、自分自身の価値観を追い求め、工夫しながらきものを日常のおしゃれ着として着ようという人が少しずつ増えている。絹至上主義ではなく綿やポリエステルへも目を向けるようになってきたのは、このあたりの流れからだという。

「好むと好まざるとにかかわらず、きものを着る人も、きものをつくる職人さんも減ってきています。かたくなに従来

のやり方をまもって衰退していくのをただ見ているより、着る文化としてきものを残すためにいろいろチャレンジをして、少しでも若い人が気楽に着られるようにしたいんです。それで余裕ができたなら、今度は価値がわかった上でいいものをどんどん買ってほしい。デジタルきものは伝統的な職人さんの手仕事をおびやかすのではなく、そのよさをわかってもらうための手はじめとして着てもらえれば。ガンガン着ても大丈夫という安心感で着るきものは、精神的にもきつと違うと思いますよ」

近年、若い人もゆかたを着るようになっていく。同じような気楽さで袴はかまのきものがなくてはこの先、きもの着手は育たない。ターゲットは若い女性ばかりではなく、目下、居内さんは定年後の日本男性に似あうきものをつくるという構想をあたためていると伺った。

「デジタルきもので今までにない意匠をつくりたい。それができたらきものは成長産業だと思います」

居内さんのことは終始、力強く頼もしかった。きもの未来もきつとその先に明るくひらけているのだろう。



デジナの主軸となる三人組。左から、十日町でプリントを担当する涌井安次郎さん、営業担当の居内久勝さん、技術サポート担当の安達雅直さん。

